

柴田 貞彦, 大屋 高德, 藤岡 幸雄,
武田 泰典*, 鈴木 鍾美*

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座
岩手医科大学歯学部口腔病理学講座*

下歯槽神経に生じた切断神経腫の一例について, その病理組織所見を中心に報告した。

症例はエナメル上皮腫の再発をきたした37歳の女性で, 15年前に下顎連続離断術を受けた。再度下顎骨連続離断術がなされたが, この時右下顎枝内側に拇指頭大の軟組織腫瘍を認めたため, 同時に切除された。この軟組織腫瘍は組織学的には多数の神経線維束の増生よりなり, 神経線維束間は密な線維性結合組織により占められていた。また, 腫瘍の一部には下歯槽神経に相当する既存の太い神経も含まれていた。

口腔領域に生ずる切断神経腫は抜歯ならびにその他の外科手術, 骨折, 義歯床の刺激などによる末梢神経の圧迫, 挫滅, 切断あるいは伸張に起因すると考えられている。しかし, 日常行われている抜歯をはじめとする歯科治療において神経への外科的侵襲をきたすことがあるにもかかわらず, 切断神経腫の発生をみることは稀れであり, その発生には外傷と併せて複雑な要因が関与しているものと思われた。

演題8. 根管治療用器具の根管内破断に関する研究
(繰り返し変位により破断させたファイルの破面解析)

外川 正, 久保田 稔*

外川歯科医院
岩手医科大学歯学部保存学第一講座*

昨年11月の岩手歯学会において, ファイル破断原因追求を目的に, 破断したファイルの破面解析を行い, ファイル破断に金属疲労破壊が深く関与していることを報告した。今回は, リーミングを想定したねじれ運動と, 湾曲根管内のファイリングを想定した屈曲ガラス管内における前後運動により, ファイルに疲労破壊を起こさせ, 破断に至ったファイルの破面解析を行った。

その結果, 強いリーミング操作を simulate する90°の繰り返し変位による破断面は, 軸方向の亀裂を伴った鋸状を呈し, 破断に至るまで約200回の変位を

要した。又, 弱いリーミング操作を simulate する30°の繰り返し変位による破断面は, 脆性破壊様を呈し, 破断に至るまで約15万回の繰り返し変位を要した。屈曲根管内でのファイリング操作を simulate する屈曲変位による破断面には, 臨床で破断したファイルに観られるストライエーションと同様のストライエーションを観ることができる, 破断に至るまで約3,000回の変位を要した。

結論: ファイルの強いリーミング操作は, 軸方向の亀裂を生じさせ, かなり少ない繰り返し操作で, ファイルを破断させる。ファイルの弱いリーミング操作は, 他の疲労破壊に比較すると進行が遅く, ファイルの破断原因とはなりにくいと思われる。湾曲根管内でのファイリング操作は, ファイルの疲労破壊を進行させ, 臨床でのファイル破断原因に深くかかわっていると思われる。

演題9. マウス顎下腺のアンドロゲン依存性エステロプロテアーゼに関する免疫学的研究

○馬場 利恵, 黒川 理樹, 太田 稔

岩手医科大学歯学部口腔生化学講座

マウス顎下腺はアンドロゲン依存性であり, その顆粒管細胞の分泌顆粒中には神経成長因子, 上皮成長因子, レニン, エステロプロテアーゼなどの生理活性物質が含まれており, これらの成分に著明な性差が認められることが明らかになっている。エステロプロテアーゼの中で, 合成基質 tosyl arginine methyl ester に特異的なものを TAMEase と呼んでいる。今回私共は, マウス顎下腺から TAMEase を精製し, その TAMEase 分子についてマウスの臓器特異性や異種動物顎下腺における存在の有無, マウス顎下腺における成長に伴う分子の消長などをイムノプロット法を用いて免疫学的に検討した。

雄10週齢マウスの各臓器, ラットやハムスターなどの異種動物顎下腺, 雌雄の1週齢から10週齢までのマウス顎下腺それぞれの粗抽出液を SDS-PAGE により展開し, それをニトロセルロース膜上に電気泳動的に移行させ, 次に一次抗体(抗TAMEaseウサギ抗体)と反応させ, それを二次抗体(抗ウサギペルオキシダーゼ標識ヤギ抗体)で検出した。また, 正確に試料中の TAMEase 量を測定するためにペルオキシダーゼ標識抗 TAMEase 抗体を用いて免疫定量も行った。

その結果、マウスと近縁なラットやハムスターの顎下腺や顎下腺以外のマウスの各臓器に抗 TAMEase 抗体と交叉反応する分子や TAMEase 活性がほとんど認められず、TAMEase はマウス顎下腺にかなり特異的に存在することが判明した。また、マウス顎下腺において雌雄で程度の差はあるが、成長に伴い TAMEase 分子の含有量が増加することが判明した。さらに雌では活性はないが抗 TAMEase 抗体と結合する分子が存在し、不活性な酵素前駆体の存在が推測される。

演題10. 紅参の metabolic modulator としての作用の検討

○高橋 栄司, 藤岡 由紀*, 伊藤 忠信*

岩手医科大学歯学部内科学

岩手医科大学歯学部歯科薬理学講座*

薬用人参が疲労感, 不眠, 手足のシビレ, 冷感などの訴えを改善し, 特に, 低血圧合併の症例に著明に効果的であることは, 臨床使用経験上よく認められることである。しかし, いかなる機序で, これら自覚症状に効果をもたらすのか不明である。そこで今回, 実験

前段階として幼若ラットに紅参末を経口投与し, 血圧, 血液生化学的一般検査所見, 各種ホルモン分泌に及ぼす影響を検討したので報告する。

ウイスター系雄性ラット(4週齢)を用い, 紅参末経口投与群6例, 対象群4例とした。紅参末投与量は, 投与開始1週は100mg, 2週は300mg, 3週は500mg, とした。投与開始日より血圧・脈拍を測定し, 4週目で, 採血し, 生化学的検査, 各種ホルモン検査に供した。同時に副腎を摘出し, 組織内カテコールアミン測定に供した。

〔結果〕1. 紅参末投与群と対象群では, 血圧の変動脈拍の変動に差異は認められなかった。

2. TTT, ZTT, T-Bil, D-Bil, TP, LAP (肝機能), Ca, BVN, VA, Crnn, (腎機能), TC, TG, PL, HDL (脂質) には, 差異が認められなかったが, 血清Pは, 投与群で増加する傾向にあった。

3. 血糖, インスリン分泌値は, 投与群が減少する傾向にあった。

4. 血中カテコールアミン(ノルアドレナリン, アドレナリン)および副腎内カテコールアミンは, 投与群で著明に増加した。しかしドーパミンには変化がみられなかった。

5. T₄ は, 投与群で増加する傾向にあった。

発行日の変更について

次号誌(11巻3号)より、原稿締切り日と発行予定日を次のように変更いたします。

11巻3号 投稿締切 昭和61年10月15日

発行予定日 昭和61年11月末日

12巻1号 投稿締切 昭和62年2月15日

発行予定日 昭和62年4月末日

12巻2号 投稿締切 昭和62年6月15日

発行予定日 昭和62年8月末日

投稿規程が若干かわりました。本誌166頁の投稿の手引きに従ってご執筆下さい。所定の原稿用紙は学会事務室に備えてあります。無料ですのでお申し出下さい。

〔訂正〕 11巻1号(1986年) 60頁(右) 下から12行目 髓中隔→骨鼻中隔

下から13行目 形態的鑄微→形態的特徴